

阿部肇一先生を送る

駒沢史学会会長 渡 辺 惇

敬愛する阿部肇一先生は、本年二月めでたく古希を迎えられ、また三月末日をもって、駒沢大学の定める規定により、定年退職されることになりました。本学のご出身である先生は、一九五八年に歴史学科の助手に着任して以来、実に四十年の長きにわたり、教育と研究に専念されるとともに、さらに本学の経営にも尽力され、今日の駒沢大学の隆盛に大きく貢献されました。本特集号は、先生の古希とご退職を記念して、ご専門の東洋史を中心に、日頃先生と親交が深く、また薰陶をうけた方々に論文の献呈をお願いしました。特に先生の恩師の一人である酒井忠夫先生からは懇篤なる玉稿をいただき厚くお礼申し上げます。執筆者一同、長年にわたる先生の公私にわたるご指導に感謝の意をこめ、また今後ますますご清栄ならんことを祈りながら、献呈いたします。

先生は、一九二八年二月一日、阿部道山氏・その子さんの長男として、埼玉県大宮市にお生れになりました。父道山氏は禅宗の名刹普門院の住職であられるとともに、長年にわたり曹洞宗大本山永平寺の相談役として、重責を担われました。先生の駒沢大学への進学に際し、周囲からはお寺を継ぐ道を選ぶことを望まれたようですが、先生は学問に対する情熱を断ちがたく、跡継ぎを弟さんに譲り、四四年地理歴史学科に進まれました。この時、先生は東京文理科大学から出講されていた山崎宏教授の講義から影響を受け、これが機縁となって、五〇年東京文理科大学の歴史学科に転ぜられました。

当時、東京文理科大学は新製の東京教育大学となり、この東洋史学教室は、山崎・酒井両先生を中心に、中国宗教史の分野で、京都大学と並ぶ存在でありました。この恵まれた環境の下で、先生は五三年にさらに大学院に進まれて研鑽を積み、

やがて六一年に「東洋史上の禅宗の展開」で、東京文理科大学賞を受けられ、これをもとにまとめられた『中国禅宗史の研究』で六七年東京教育大学より文学博士の学位を授与されました。その後、八六年同書の増訂版を出され、さらに九三年には続中国禅宗史の研究として『禅宗社会と信仰』を出版され、研究の一層の拡大と深化に努められました。先生のご研究は、山崎先生の言葉を借りれば、それまでの禅僧の師嗣の關係を中心とした禅宗史と異なり、禅僧・禅宗集団を当該時代の政治や社会の動向と緊密に関連させて究明された「新しい型の禅宗史」であり、当時の学界に新風を吹き込みました。

先生はまた長年の教育活動を通して沢山の優れた教え子を育てられました。先生の研究室に入ると、教え子の書いた膨大な量の卒業論文（コピー）が整然と保存されているのに感銘を受けました。先生は早くから東洋史研究会を主催され、学生との交流を深められました。ご退職が間近いある一夜、東京湾を望むホテルで開催された送別会には、全国各地から沢山の卒業生が馳せ参じ、きわめて盛会でした。これも阿部先生のご人徳と感化の大きさを物語るものと思います。

先生に関して、もうひとつ特筆すべきは、大学の運営に大きく関わられたことです。七九年、中島関爾文学部長の急逝のあとをうけ文学部長に就任し、二期勤められたあと、八五年財務担当の副学長として、折から生起した大学運営上の諸問題の解決に当られました。この時私は先生のお世話で駒沢大学に赴任しましたが、東洋史の専任が、先生と私の二人という状況の中で、奮闘される先生の姿が今でも思い出されます。九〇年代に入り、バブルがはじけ、日本経済の変調がはじまるなかで、大卒の時代が叫ばれるようになりました。そして駒沢大学の経営が再び問題となるや、九三年先生は敢然と立候補され、学長に就任され、難局の打開に取組まれました。またこの間、八二年駒沢大学が百周年を迎えた際、先生は大学百年史の編纂委員長としてその重責を果たされました。

仕事の合い間に、時々先生のお部屋にお邪魔して聞くお話は、ユーモアに富み、楽しくかつ有意義なものでありました。そのなかで、先生が大学の現在および将来について心配され、しばしば真剣に語られたのが、特に印象に残っています。温厚で篤実、飾らぬご性格の先生、いつまでもお元気で、私たち後進をご指導下さいますよう祈念いたします。